禁裏・公家文庫研究　第四輯☆目次

序――東山御文庫雑感――……吉岡眞之

第一部

『言談抄』の三伝本の関係　三角洋一　3

「大日本史編纂記録」の史料的特質　鍛治宏介　17

近世朝廷における公日記について――執次「詰所日記」の部類目録を中心に――　村和明　59

東山御文庫所蔵『日本紀略』と禁裏文庫の『日本後紀』――二十巻本『日本後紀』の抄出紙片をめぐって――　志村佳名子　85

第二部

早稲田大学図書館所蔵『先秘言談抄』の書誌と翻刻――三條西家旧蔵本『言談抄』の紹介――　田島公　109

三条西家旧蔵『禅中記抄』　中町美香子　117

宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』八「興福寺供養」　藤原重雄　147
『公卿補任』正中元年条の復原　宮崎康充　163

第三部

翻刻『近衛家記録十五函目録』（昭和十五年四月）　尾上陽介　171
陽明文庫所蔵『兵範記』紙背文書目録（十五函之内第十一函及第十二函）　尾上陽介　195
陽明文庫所蔵『勘例』内容目録　田島　公　213
西尾市岩瀬文庫　柳原家旧蔵資料目録（A）（B）　西尾市岩瀬文庫編　（117）
宮内庁書陵部所蔵柳原家旧蔵本目録（稿）　小倉慈司　（47）
宮内庁書陵部所蔵九条家旧蔵本目録（稿）　小倉慈司　（1）
あとがき　執筆者一覧

第一部

『言談抄』の三伝本の関係

三角洋一

はじめに

大江匡房の関係する言談書『言談抄』については、以下の三種の伝本が知られている。山崎誠［一九八五］の紹介・翻刻する西尾市岩瀬文庫蔵柳原家旧蔵『言談抄』（略称、岩瀬本、岩）、小倉慈司［二〇〇六］により目録に登載された京都御所東山御文庫蔵『秘記』（東山本、東）、田島公［二〇一一］の紹介・翻刻する早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵『先秘言談抄・本朝世紀』（三条西家本、西）がそれである。

それぞれの書誌は、岩瀬本については山崎［一九八五］また田島［二〇〇九］に、三条西家本については田島［二〇一一］に記載があり、東山本については小倉［二〇〇六］の「勅封一一九函七」に「明暦」の印記のあることが指摘され、田島［二〇〇九］にも若干の情報が述べられている。私はいずれも実見しておらず、田島氏を代表とする科研費研究の連携協力者の立場から三伝本のデジタル画像を見せていただいたにすぎない。ここでは以下、テキストの複製を対象として取り組んでも、この程度のことはいえるのではないかという報告である。

本稿のきっかけは、すでに翻刻をすませていた田島氏から、ある部分の読みについて確認を求められたことがあり、その折に私は、三伝本は親子か兄弟か、仮に他本を介したとしてもきわめて近い関係にあることに興味をおぼえ、一、二度臆測めいたことを申し出たことから、すこし気を入れて観察をはじめたことに由来する。

国文学においては、現在も本文研究は盛んなようであり、一本一本を貴重な資料として扱うのは結構であるが、校本作成となるとかなり下火で、諸本を大まかにグループ分けするまでの作業はあっても、本文系統論に及ぶ発言はほとんど見かけなくなった。また、手にとっている一本についてはよく観察しても、その親本（書本）はどうであったのか透かし見ようとする踏みこんだ発言もあまり聞かない。この点、『言談抄』の場合は直系か同系かを云々することもできそうだし、親本の体裁・様態についてもいくつか推測されることがあるので、私にとって恰好の資料にめぐり会ったという思いでいる。

のちのちの考察にも必要なので、まず奥書を見てみることにしよう。三条西家本は一一オ（表）で本文が終わり、一一ウ（裏）に、

右一冊、申請　禁裏御本、命頭中将
令書写者也。銘一字滅記抄有之
不分明、後日可加清書也。
大永八仲夏下旬　　都督郎（花押）

とある。これは田島氏の翻刻の傍注に指摘するとおり、大宰権帥三条西公条による大永八年（一五二八）の奥書で、禁裏御本を子息の頭中将実枝に書写させたものであることが知られる。ちなみに、実枝は十八歳であったことになる。岩瀬本は一三ウに最終の第四五話のうち末尾二行を記したのち、小字で、

寛政八六十一以異本一校　　均光

同月十八又以異本校合了

とある。山崎氏や田島［二〇〇九］によれば朱筆で、柳原均光が寛政八年（一七九六）に、おそらく二度、異本をもって校合したことを意味していよう。東山本は一四ウの末行で本文が終わり、一五オの右下に「明暦」の長角印を押し、やや間を置いて左隣に花押がある。明暦（一六五五～八）を含む、以前の書写と見てよいだろうか。

以上により、まず三伝本が現存しており、他に三条西家本の親本となった禁裏御本（禁裏本、禁）と、岩瀬本の本行本文の対校に用いられた異本の存することも知られたわけである。この範囲内で最も簡略な三伝本の関係を想定するならば、東山本の親本は禁裏本か三条西家本（か論理的には岩瀬本の奥書にいう異本）、岩瀬本の親本は禁裏本か三条西家本か東山本のはずで、岩瀬本の校合に用いられた異本は、親本ではない残る二伝本のうちのどちらかではないか、という可能性を考えてみることになるかと思う。東山本や岩瀬本、また岩瀬本にいう異本の本文を遡らせても、禁裏本には収斂しなかったり他本の介在を考える必要があったりした場合には、そこで初めて未知の本X・Y……の存在を仮定することにして、とりあえずは最大五つの伝本の存在を念頭に置いて、以下の考察に入りたい。

一　東山本と岩瀬本のそれぞれの親本

はじめに、三伝本の第一面にあたる一オの現状について観察する。

①　三伝本の第一面の体裁

西は、一行目をアキ（空き）とし、第三話の第一行まで本文が九行あって、一面一〇行書きである。わざわざ一行目を空けたのは、首題を書きこむためであったか。東は一行目にアキを設けず、第二話との間を一行アキとし、第二話の最終行まで書きつけており、一面九行書きである。続く一ウの一行目にアキを設けてから第三話に移っており、丁を裏返したり丁が変わったりしても、説話の区切り目ごとに一行アキを守っている（第三〇話と第三一話との間にアキのないこと、第三三話と第三四話の間が二行アキであることについては後述）。岩は一行目にアキを設けず、第二話との間を一行アキとし、第二話を終えたあとに一行アキを設けていて、一面一〇行書きである。第九話と第一〇話との間に一行アキがないのは、二ウから三オへと丁変わりしたことにかかわる不注意であろうか。

三条西家本は一つの説話と次の説話との間に一行のアキを設けないが、第一面の第一話から第三話までの冒頭右肩にカギ（鉤点）を付しており、丁を裏返した一ウの第四話以降になるとカギを付さなくなる（第三一話冒頭のカギについては後述）。このカギは説話ごとの区切りを明瞭に示すために付したもので、一ウ以降は、次の説話と紛れないかぎりは付す必要のないものであった。その点、東山本は説話と説話の間を一行アキにすることで紛れるのを防いでいる。ところが岩瀬本になると、説話と説話の間を一行アキにして書写しながらも、丁を裏返した一ウの一行目に始まる第三話の冒頭にまでカギを付している。

ここから、岩瀬本は東山本のごとき一行アキの親本にしたがって書写しながら、三条西家本のごとき異本を校合に用いて、新たにカギを書き加えたという事情が推測される。もうしばらく三伝本それぞれの書写態度をうかがってみることにする。

②　第三話の二箇所の一字アキ

第三話は、西では一オの一〇行目から一ウの三行目にわたっている。

京極太閤云、放生会は一日の斎歟。可有前斎」　1オ
歟。□匡房申云、一日の斎也。但、入月時は忌服薬、
城外庁拷訊政歟。□重云、服薬は何事哉。申云、
蒜肉の類也。
（注）第一行「一日」は「百」とあり、二字に分けた「一日」と解する。
第二行「一日」は「百」とあり、「一日」と解する。

東では一ウの一行目をアキとし、二行目から書き始めるが、第三話の第一～二行は、

京極太閤云、放生会は一日の斎歟。可有前斎歟。
匡房申云、一日の斎也。但、入月時は忌服薬、城外
（注）「一日」は二例とも、「百」の「一」を残して擦り消すように汚したあと、「白」の上部に「一」を書き加える。「一日」と解する。

とあり、岩は一ウの一行目から書き始めて、その第一～二行は、

京極太閤云、放生会は一日の斎歟。可有前斎
歟。□匡房申云、一日の斎也。但、入月時は忌服

となっている。三条西家本も岩瀬本も、第一行の字詰めを同じくし、第二行の「匡房」の上を一字アキにしている。ところが、東山本は第一行に「歟」までを書写したためか、おそらく一字アキを節約して、第二行冒頭から「匡房」云々と書き始めている。三条西家本の第三行の一字アキは東山本でも岩瀬本でも守られており、この二箇所の一字アキはどの伝本の親本にも存したものと思われ、どうも東山本は親本の一行字詰めにはそれほど拘泥していないように感じられる。

ここで奇妙なことに気づく。つまり、岩瀬本は東山本のごとく説話の区切り目ごとに一行アキとなっている親本をそのとおりに書写したのに、一行字詰めや一字アキなどの体裁という点からは東山本を書写したはずがなく、むしろ三条西家本に近似するのである。といって、三条西家本を親本としたものとはきわめて考えにくい。漠然とした見とおしとして、東山本も岩瀬本も禁裏本を親本にしているのではないか、と想定したくなるところである。

あとがき――学術創成研究の成果と古典学再生への道程――

本書は、二〇〇七（平成一九）年度～二〇一一（平成二三）年度科学研究費補助金（学術創成研究費）「目録学の構築と古典学の再生――天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明――」（研究代表者：田島　公、課題番号　一九ＧＳ〇一〇二）で行った研究成果を収録したものである。

本研究プロジェクトに対しては、独立行政法人日本学術振興会より、五年間で直接経費四億七六〇万円（間接経費も含むと五億二九八八万円）を交付されている。研究計画の概要や経緯、その後の進捗状況に関しては、本シリーズ『禁裏・公家文庫研究』第三輯（思文閣出版二〇〇九年）の「あとがき」で研究代表者が詳しく記したので、そちらを参照していただくこととし、ここでは繰り返さないが、研究の具体的な目的を確認するため簡単に述べると、以下の通りである。

本研究プロジェクトの目的は、日本古典研究の中核的史料を伝えていながら、その全体像が不明であった、天皇家ゆかりの文庫や主要公家文庫のデジタル画像を蔵書群毎に集積しながら、蔵書目録等を利用して、旧蔵形態を共時的に復原するとともに、蔵書群の伝来の変遷や古代・中世以来の公家社会が、その文庫群を媒介として伝え育んできた伝統的な知識体系の構造や具体相を通時的に解明することであり、利用しにくかった禁裏・公家文庫収蔵古典籍・古文書を用いた研究の基盤を飛躍的に改良し、利便性の向上をめざすことである。具体的に述べると、以下の四点の遂行を目指して研究活動を行っている。

（1）天皇家ゆかりの文庫（京都御所東山御文庫収蔵禁裏本・宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本など）、主要公家文庫（陽明文庫所蔵近衛家本、宮内庁書陵部所蔵九条家本・同所蔵柳原家本、西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本など）に収蔵される史料のデジタル画像の作成や集積を約一〇〇万件行う（社寺文庫の一例として「東南院文書」の高精細デジタル画像の撮影も含む）。

（2）東山御文庫本・伏見宮家本の一画像毎の「デジタル画像内容目録」の作成等により、天皇家ゆかりの主要二大文庫群の利用環境を飛躍的に高める。そして、上記（1）（2）で集積・作成したデジタル画像やデジタル画像内容目録を、所蔵機関の許可を得て、東京大学史料編纂所の図書閲覧室のＰＣで閲覧できるようにするなど、公開の準備を行うこと。

（3）日本古典学の研究支援・研究補助ツールを充実させるため、まず、古代史研究には欠かせない、「神代」から天応二年（七八二）までの古代人名をほぼ網羅する人名辞典である、竹内理三・山田英雄・平野邦雄編『日本古代人名辞典』一巻～七巻（吉川弘文館　一九五八年～一九七八年）の大幅な増補・改訂を行い、更に九世紀末までの古代人名のベータベース構築の前提作業として、木簡に記載される人名を網羅し、検索に便利な「木簡人名データベース」の完成と公開、

更に「中国目録学」の影響を受けて形成される「日本目録学」の発展を考えるため、八世紀から一二世紀末までの対外関係記事、移動した人・物の情報を網羅して集成した田島公編『日本、中国・朝鮮対外交流史年表――大宝元年～文治元年――』（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁――奈良・平安の中国陶磁』臨川書店　一九九三年）を、特に、日本にもたらされて利用された漢籍を記録類などから収集して網羅するなど、大幅に増補改訂する。

（4）「東山御文庫本マイクロフィルム内容目録」・「宮内庁書陵部所蔵伏見宮本目録」・「同所蔵九条家本目録」・「同所蔵柳原家本目録」・「西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本目録」・「陽明文庫所蔵『近衛家記録十五函文書』目録」・「東京国立博物館所蔵「菊亭家（今出川家）旧蔵典籍類目録」・「『大日本史編纂記録』内容目録」など天皇家・主要公家文庫の蔵書目録の作成と公開、禁裏文庫・主要公家文庫の変遷や収蔵古典籍・古文書などの目録学的研究、主要史料の翻刻（京都御所東山御文庫所蔵「地下文書」・「延暦寺文書」など）及び収蔵史料の個別研究（例えば、後三条天皇撰や源有仁撰の儀式書の研究他）の進展、「大日本史編纂記録」の目録学的な基礎研究をめざすと共に、その成果の研究者への還元や更には古典研究の素晴らしさ・楽しさを市民に伝える市民向け講座（立命館大学朱雀キャンパスでの「陽明文庫講座」・西尾市岩瀬文庫での「岩瀬文庫特別連続講座」・金鶏（きんし）会館［県立長野高校同窓会館］での「古典を読む――歴史と文学――」他）の実施など、古典研究の裾野を広げる文化啓蒙活動を行う。

本研究については、三年間が終了した時点の研究課題の進捗状況に関して、二〇一〇年四月下旬に提出した研究進捗状況報告書及び研究進捗評価の公開用資料をもとに、同年八月九日に日本学術振興会で研究進捗状況に関するヒアリングが行われ、九月三〇日付けでいただいた研究進捗評価は、A＋、A、B、Cのうち、

A（当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待通りの成果が見込まれる）の評価であり、

「評価意見」として以下の指摘がなされた。

禁裏・公家文庫収蔵本のデジタル画像の集積は、期待以上の成果を挙げている。これを公開することにより、今後の研究の発展が期待される。蔵書目録・文庫史の研究、禁裏・公家文庫収蔵史料の個別研究の研究者への還元、古典学普及のための市民向け啓豪活動についても、順調に研究成果を挙げている。東山御文庫本・伏見宮家本の「デジタル画像目録」の作成については、「目録学」のコンセプトをより明確にする方向での具体化が望まれる。『日本古代人名辞典』の増補・改訂については、新たに大型の研究費を申請することで、その研究成果に期待したい。

以上の評価結果及び研究代表者が提出した公開用資料は、日本学術振興会の以下のHP上で公開されている。

評価結果

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/18_sousei/data/h22/c_hyouka_kekka/hyouka/m_resulto02_tajima.pdf

公開用資料

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/18_sousei/data/h22/c_hyouka_kekka/kouhyou/progre02_tajima.pdf

なお、上記の研究目的の一部は、研究プロジェクトの三年間の進捗状況や上記のヒアリングの結果を踏まえ、当初の研究計画の一部を修正・変更したものである。

これらの研究プロジェクトの期間中の進捗状況や研究成果は、本書も含め、以下の刊行物・報告書で公開した。

Ⅰ田島　公編『禁裏・公家文庫研究』第三輯（思文閣出版　二〇〇九年）

Ⅱ田島　公編『禁裏・公家文庫研究』第四輯（思文閣出版　二〇一二年）

Ⅲ『東京大学史料編纂所研究成果報告書』二〇〇八―一（二〇〇七年度～二〇〇八年　科学研究費補助金［学術創成研究費］報告書『目録学の構築と古典学の再生――天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明――』研究代表者田島公　二〇〇九年）。以下、学術創成研究報告書【1】と略称。

Ⅳ『東京大学史料編纂所研究成果報告書』二〇〇九―四　本冊・別冊（二〇〇九年度～二〇一〇年度科学研究補助金［学術創成研究費］研究成果報告書『目録学の構築と古典学の再生――天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明――』研究代表者田島公　二〇一一年）。以下、学術創成研究報告書【2】本冊・別冊と略称。なお別冊は鍛治宏介編『「大日本史編纂記録」目録』である。

Ⅴ『東京大学史料編纂所研究成果報告書』二〇一一―三（二〇一一年度科学研究補助金［学術創成研究費］研究成果報告書『目録学の構築と古典学の再生――天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明――』研究代表者田島公　二〇一二年）。以下、学術創成研究報告書【3】と略称。

Ⅵ田島　公編・刊『日本、中国・朝鮮対外交流史年表（稿）――大宝元年～文治元年――［増補改訂版］』二〇一二年

Ⅶ田島　公編『史料から読み解く三河――西尾市岩瀬文庫特別連続講座――』（笠間書院　二〇一二年）

Ⅷ末柄　豊解題・校訂『京都御所東山御文庫所蔵　地下文書』（［史料纂集　古文書編］八木書店　二〇〇九年）

Ⅸ末柄　豊解題・校訂『京都御所東山御文庫所蔵　延暦寺文書』（［史料纂集　古文書編］八木書店　二〇一二年）

Ⅹ東京国立博物館古典籍叢刊『九条家本延喜式』第一巻・第二巻・第三巻（全五巻のうち、思文閣出版　二〇一一年・二〇一二年）

Ⅺ田島　公「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』解説」「尊経閣文庫所蔵『春玉秘抄』解説」（前田育徳会尊経閣文庫編『無題号記録　春玉秘抄』［尊経閣善本影印集成］四九　八木書店　二〇一一年）

Ⅻ東京大学史料編纂所・奈良文化財研究所共同開発「木簡人名データベース」（奈良文化財研究所HP、http://jinmei.nabunken.go.jp/mokkan_name/）

などを参照されたい。

さて、前置きが長くなったが、以下、本書の構成及び収載論文・目録等の簡単な紹介を行う。

第四輯は三部構成で、先ず、第一部では、中世後期、近世の禁裏・公家文庫収蔵史料の研究のうち、禁裏・公家文庫の研究にも関係する論文を収載した。

①三角洋一「『言談抄』の三伝本の関係」は、大江匡房（一〇四一

禁裏・公家文庫研究　第四輯

2012(平成24)年3月21日発行

編　者
田島　公

発行者
田中　大

発行所
株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355　電話 075(751)1781㈹

定価：本体9,200円(税別)

印刷・製本　株式会社 図書印刷 同朋舎
© Printed in Japan, 2012
ISBN978-4-7842-1614-7　C3324

執筆者一覧（掲載順）

編者

田島　公（たじま・いさお）

1958年生．京都大学大学院文学研究科博士後期課程(国史学専攻)中途退学．東京大学史料編纂所教授．

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

吉岡眞之（よしおか・まさゆき）

1944年生．東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程．東京大学史料編纂所特任教授，国立歴史民俗博物館名誉教授．

三角洋一（みすみ・よういち）

1948年生．東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退(国文学)．東京大学大学院総合文化研究科教授．

鍛治宏介（かじ・こうすけ）

1973年生．京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学(日本史学)専修．京都大学大学院文学研究科教務補佐員．

村　和明(むら・かずあき)

1979年生．東京大学大学院人文社会系研究科(日本文化研究専攻)博士課程修了(学位取得)．博士(文学)．公益財団法人三井文庫研究員．

志村佳名子（しむら・かなこ）

1982年生．明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程修了．博士(史学)．東京大学史料編纂所RA，(2012年4月より日本学術振興会特別研究員(PD))．

中町美香子（なかまち・みかこ）

京都大学大学院文学研究科博士後期課程(歴史文化学専攻)研究指導認定退学．博士(文学)．京都大学文学部等非常勤講師．

藤原重雄（ふじわら・しげお）

1971年生．東京大学大学院人文社会系研究科(日本史学)博士課程単位取得退学．東京大学史料編纂所助教．

宮崎康充（みやざき・やすみつ）

1950年生．学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程中退．宮内庁書陵部勤務．

尾上陽介（おのえ・ようすけ）

1963年生．早稲田大学大学院文学研究科史学(日本史)専攻博士後期課程2年退学．東京大学史料編纂所准教授．

小倉慈司（おぐら・しげじ）

1967年生．東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(日本文化研究専攻)単位取得退学．博士(文学)．国立歴史民俗博物館准教授．